

## 愚かな金持ち

新約聖書によつてある福音書のなかでマタイ・マルコ・ルカのみつつの福音書は「共観福音書」と呼ばれます。これは一番最初に書かれたマルコによる福音書をお手本にして書かれたのがマタイとルカ福音書だからです。マタイはマルコをベースにしてさらにユダヤ人向けに、わたしたちが待ち望んでいたメシアはナザレのイエスであるということを明らかにしようとしてしました。一方、ルカは第一章にローマ帝国の高官テオフィロにあてた献呈の言葉がありますように、地中海世界に住むすべての人々に向かって救い主イエス・キリストを紹介しようとしています。その結果、ユダヤ的な要素を薄めつつ、女性や社会的弱者への視点を強調した福音書になっています。またおそらく福音書記者のなかでもっとも教養があったルカは文章も見事ですし、よきサマリア人や、放蕩息子など、有名なたとえ話も多いです。さて今年の7月から、そのルカによる福音書から、マルコやマタイにはないルカだけの「特殊記事」と呼ばれるものを取り上げて説教をしています。そのことによって福音書記者ルカが強調したかったことがくっきりと浮かび上がってくるのではないかと考えたからです。今日、わたしたちに与えられている「愚かな金持ちの譬え」も、その意味でさまざまな気づきを与えてくれる聖書箇所でした。まずこの出来事を追ってみます。

イエスさまのお話を聴きに集まっていた群衆の中からある人が、おそらくイエスさまの話が一段落したのをみて、願いをしました。「先生、わたしにも遺産を分けてくれるように兄弟に言って下さい」と調停を求めたのです。これに対して主イエスは「誰がわたしを、あなたがたの裁判官や徴税人に任命したのか」と言い返し、そこにいた人々に向かって「どんな貪欲にも

注意をはらい、用心しなさい。有り余るほど物を持っていても、人の命は財産によってどうすることも出来ないからである」とお語りになりました。そして、愚かな金持ちの譬えを話し始められたのです。たとえ話の内容に踏み込む前に、ここでイエスさまが人々に注意するようにいわれた「貪欲」についてひと言触れておきます。キリスト教では、この罪は「世界を自分の中に取り込もうとする飽くことのない欲望」とされています。飽きることがない、尽きることがないという特色は、このあとの譬え話の金持ちにあてはまります。それは世界を自分に仕えさせようとし、自分の中に世界を取り込もうとする自己中心的なありかた、みずからを神の立場に置いていることが問題の中心であることを心に留めて下さい。

さて、イエスさまが語られた譬え話そのものに難しいところはないでしょう。ここに出てくる「ある金持ち」は畑が豊作であったとありますから、この時代の地主ですね。働かなくとも小作にあたる者たちが収穫物を運んでくる。しかも豊作だったので嬉しくてたまらない。金持ちは、さあ、どうしようか、もうしまっておく場所がない。思い巡らしたすえに、やがて「今ある蔵を壊して、もっと大きいのを建て、そこに穀物や財産を皆しまいこみ、こう自分に言ってやるのだ。「さあ、これから先、何年も生きていくだけの蓄えができたぞ。ひと休みして、食べたり飲んだりして楽しめ、と」、そう自分に言い聞かせたわけです。これに冷水をあびせるのがイエス様です。神は、この金持ちに向かって、「愚かな者よ、今夜、お前の命は取り上げられる」という。彼の思い通りにはなりません。そして、イエスさまは、自分のために富を積んでも、神の前に豊かにならない者は、この通りだ、と引導を渡されるのです。身につまされる話ですね。イエスさまは、遺産分割をもとめた人から話を引き取り、貪欲

に注意しなさい。有り余るほどものを持っていても、人の命は財産によってどうすることも出来ないと言われました。この譬えはまさにそのポイントを突いています。さきほど教養のあったルカは文章も見事だと言いましたが、この箇所ではルカは日本語に訳してしまうと同じようになってしまうのですが、幾つものギリシア語を使い分けて実に微妙なニュアンスでわたしたちの心得違いを浮き彫りにしています。幾つか例をあげますが、まず「人の命は財産によってどうすることも出来ない」という箇所はあえて直訳ふうを意識をさせていただくと「人の命は、人に所属するものとイコールではない」という書き方がしてあります。貪欲の問題性があらわれるのはここだと思うのですが、畑が豊作で収穫物がどんどん入ってくる。食べるものがあれば長く生きることが出来る。お金にも変えられる。あれも出来る、これも出来ると、自分の内にモノをたくさん取り込むことで彼の夢は際限なく広がってゆく。どんどん世界を自分の内に取り込むことによって彼自身がどんどん偉くなってゆく、何でも出来ると錯覚する。勘違いする。モノへの依存が進み、自信をもつ。みずからを信じる。みずからの持ち物を信じる。その結果、神から離れてしまう。しかし、ルカは「あなたの命は、あなたに所属するものとイコールではない・等しくない」とイエスさまのお言葉を表現しました。遺産相続の件でいえば、あなたに所属するものが兄弟との遺産相続をやり直した結果、前の取り分より増えて2倍、3倍になろうと、あなたの命が2倍3倍になるのではない。この悲劇的な錯覚を、財産によってしてしまうことが「愚か」といわれる内容なのですね。遺産相続を願って、お金や持ち物を増やそうとした人の中にある問題性はさらに譬え話によって強められます。イエスさまは譬え話のなかで、豊作を喜んだ金持ちに「こう自分に言ってやるのだ。『さあ、

これから先、何年も生きていくだけの蓄えができたぞ、一休みして、食べたり飲んだりして楽しめ』』といわせています。問題は「こう自分に言ってやるのだ」という自分に語りかける部分です。ここは原文ですと「わたしは、わたしの魂に言おう。魂よ、あなたは多くの年をたもつ多くのものを得た」となっているのです。このあたりニュアンスが捉えにくいと思いますが、日本語でも魂と心と命はどう違うのか、何を指しているのか定義をきちんとするのは難しいですね。英語の聖書ですと、ここでいう魂は Soul が使われています。さきほどの「人の命は財産によってどうすることも出来ない』』という箇所命は Life です。Soul. Life Spirit. Heart. Mind など、目に見えないものをあらわす単語は区別が難しいですね。しかし福音書記者ルカはきちんと言葉を使い分けています。聖書で使われているギリシア語でいいますと、「人の命は財産によってどうすることも出来ない」という命は、肉体の命のニュアンスの単語です。これは身体にかかわる命です。わたしたちでもケアできる部分ですね。食べ物に注意したり、運動をしたりしてなにがしかの関与をすることが可能です。ところが、この金持ちが「自分に言い聞かせていった」という「自分」、つまりギリシア語で「魂」、英語で Soul にあたる部分はダメです。これは人間が自分ではふれることの出来ない中心、その人をその人たらしめる最もピュアで、コアな部分、核となる命なのです。神さまから与えられた息によって人は生きるものとなりましたが、ニュアンスとしてはそれに近い。何が言いたいかと言いますと、この金持ちはたくさんの収穫物、富を得たことによって、本来ならば自分の手の中に持てるはずのない魂の領域をも自分の自由になると考えてしまったことが問題なのです。これはわたしたちに魂としての命をお与えになる神さまの主権の侵害に等しいものです。

だから、神さまはそれを彼から取り上げることによって、ご自身が神であることを示されるのです。「あなたの命は、あなたの持ち物とイコールではない」、まして魂をも自分の持ち物によって自由に出来るかのような思い上がりに対して、神さまは「愚かな者よ」と言い渡されるのです。この「愚か」と訳されたギリシア語は「無分別」「分別がない」という意味もあります。ゴミの分別というときに使う言葉です。つまり、あのイエスさまに調停を持ち込んだ人も、それを聞いてイエスさまが話された譬え話に出てくるこの金持ちも、分別が出来ていないのです。命と魂を分別できない。命を与える存在と命を与えられる存在の区別ができていない。わたしたちはどうでしょうか。これはイエスさまがずっと戦い続けた問題でした。福音書をきちんと読めば、イエスさまは、いつもわたしたちのお金と命の問題に向き合ってこられたことがわかります。それはわたしたちが関心をもつのは結局、お金と命の出来事であり、つまるところ、お金でもってすべてを賄おうとし、命をも購おうとする人間の心得違い、それこそが罪の本質ですが、そこから生まれる悲劇からわたしたちを解放し、生ける神さまとの交わりを回復されようとしたのです。イエスさまは神様とわたしたちの関係が途絶えていること、切れてしまっていることを悲しみ、つながなければと願っておられますが、人々はそれに気づきません。神さまへの信頼を失っているから自分で思い悩まなければならない。「自分で」「自分のお金で」なんとかしようと懸命になってしまう。それらすべてはみな、わたしたちが神さまへの信頼をなくしているためです。だからモノに頼らなければならず、お金やモノに囚われてしまうのです。その事実をわたしたちの目の前に突きつけるためにイエスさまはこの出来事につづけて、「愚かな金持ち」の譬え話を語られたのです。これはルカによ

る福音書だけが伝えている出来事ですが、たいへん慰めあることに、ルカはこの出来事のすぐあとに「野の花、空の鳥」を続けるのです。マタイによる福音書の山上の説教のなかに収められた、わたしたちの愛するあの部分が、ルカではここに繋がられています。愚かな者よ、と言われたあとで、その愚かな者たちを、神がどれほど愛しておられるか、配慮をしてくださっているかをカラスや野の花に託して語るのです。実に行き届いた構成ですね。命のこと、魂のことは、あなたがたの思い図ることではない。それは神さまにまかせなさい。金やモノにたよるのではなく、神さまがあなたがたにまさって、あなたがたの命を、魂を見ていることに目を向けなさいと言われるのです。そうすれば、あなたは、あなたの命は、思い煩いから解放されて神さまの前に豊かになる道へと招かれていることに気づくだろう。そう主イエスは、すべてのものに惜しみなく注がれる神さまの愛を取り次いでおられるのです。

お祈りいたします。